様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号：15101
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2012
課題番号：23659349
研究課題名（和文）がん予防のための社会心理学的アプローチから見たこころとがんに関するコホート研究
研究課題名（英文）Cohort study on mentality and cancer from social psychological approach for cancer prevention
研究代表者
岡本　幹三（OKAMOTO　MIKIZO）
鳥取大学・医学部・講師
研究者番号：40032205

研究成果の概要（和文）：40 歳～79 歳を対象に、全国 25 施設 6 万件の 20 年間追跡の大量データを利用して、こころとがんの発生およびがん死亡との関連性を統計的に検討した。その結果、生き甲斐やストレスおよび生活満足度などの生活状態とがんの発生や死亡との有意な関係は認められなかった。傾向としては、調査開始初年度における生きがい、ストレスなどの日常生活におけるこころの持ち方ががんの発生や死亡に少なからず関与している、という結果が認められた。

研究成果の概要（英文）：We examined the statistical relevance between mentality and the incidence of cancer, and cancer mortality of people 40 to 79 years of age.　We used large amounts of data of 60,000 cases at 25 nationwide facilities, from our 20 year follow-up survey.　As a result, no significant relationships were observed between the incidence of cancer and cancer mortality, and the development of cancer and living conditions, such as life satisfaction and stress.　The incidence of cancer and deaths often showed a tendency to depend on their attitude towards their daily life through life satisfaction or stress in the first year our survey had begun.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：社会医学・公衆衛生学･健康科学
キーワード：生きがい、ストレス、生活満足度、がん罹患、がん死亡、がん予防、Cox 比例ハザードモデル、がん予防

１．研究開始当初の背景

近年、診断技術の進歩と予後の改善によって「現代は多重がん時代」と言われるほど今やがんイコール死という概念は少なくなってきている。それだけにがんを抱えながら人生の終焉を迎えることは必至である。今や、がんの一予防、二次予防の必要性は言うまでもないが、がんを抱えながらの三次予防は

益々重要となってきているといえる。がんになっても諦めることなく、如何にＱＯＬを高めて生きるかは重要な課題である。この点、日常的な生活における精神面の維持・コントロール、こころの持ち方、こころの健康維持が重要な鍵を握るといえる。しかし、当分野におけるこころとがんの関連性に関する研究報告はほとんどない。

２．研究の目的

大規模コホート研究データを用いて、日常的な生き甲斐やストレスおよび生活満足度などの生活状態ががんの発生ならびにがん死亡にどうかかわっているか、について生存解析により明らかにする。また、がん罹患よりがん死亡により強く関係しているかどうかについても比較検討し、がんの生命予後に日常的な主観的健康度が深くかかわっていることを明らかにしていきたい。

３．研究の方法

文部科学省大規模コホート研究（JACC Study）データの利用承諾を得て，全国 25 施設(45 地区)の生活習慣既往歴などのアンケート調査を基にした蓄積データを活用して集計解析を行った。

調査対象は、40 歳～79 歳の 59,474 人で、調査期間は 1988 年から 2008 年までの 20 年間であった。

がんとの係りを調べるためにこころの持ち方として、アンケート項目の日常的な生活態度項目を参照した。内訳は、「生きがいをもって生活していますか」、「日常ストレスが多いと思われますか」、「仕事はいつも急いで完成しようとしておられますか」、「腹が立つことが多い方ですか」、「生活をよく楽しむ方ですか」などをカテゴリー化したものであった。

解析は、がん既往と追跡 5 年以内のがん罹患および追跡３年未満の死亡者は除外して行った。リスク解析には Cox 比例ハザードモデルを適用し、開始初年度における生きがい、ストレスなどの社会心理的な生活態度について、がん罹患と死亡への影響を検討した。調整因子として、性、年齢、喫煙習慣、飲酒習慣および肥満度を投入し解析した。

４．研究成果

生き甲斐やストレスおよび生活満足度などの日常的な生活におけるこころの持ち方が、がんの発生や死亡に有意に関係する、という結果は認められなかった。よって、こころの持ち方ががん罹患よりがん死亡により強く関係する、という有意な結果も認められなかった。

性・年齢 10 歳階級別がん発生や死亡の部位別にもリスク解析をしたが有意な関係は認められなかった。

有意ではないが、傾向としては、調査開始初年度における生きがい、ストレスなどの社会心理的な生活態度ががんの発生および死亡に少なからず関与している、という結果が認められた。

しかし、内容的には肥満度や喫煙習慣および飲酒習慣などの交絡因子で調整してもストレスが少ないほどがん罹患や死亡が高くなる傾向や仕事はいつも性急にする方が逆にがん罹患・死亡割合が低くなる傾向を認めた。生きがいや生活を楽しむについても、ある方が、ない者に比べてがんの罹患・死亡リスクが高くなる傾向を認めた。

他方、がんとは対照的に、循環器疾患の既往を除外したリスク解析では、こうした社会心理的な生活態度が循環器疾患の罹患や死亡リスクを減少させる方向に有意に関与している、という逆の結果を得ている。

また、生きがいについては、既に全死亡に

おいて日常的に生きがいをより多くもって生活する方が 5 年および 10 年生存率は高くなる結果を認めたことを報告している。

限界として、調査対象者の選択バイアスによる母集団の代表性の問題と調査開始時の生活習慣既往歴などのアンケート調査 1 回のみの情報でのリスク解析で、その後 20 年間の変化は考慮していないことなどが上げられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）

①Chisato Hamashima, Mikizo Okamoto, Michiko Shabana, Yoneatsu Osaki and Takuji Kishimoto, Sensitivity of endoscopic screening for gastric cancer by the incidence method, Int. J. Cancer, 査読有、133, 2013, 653–660

②Haosheng Mu, Shinji Otani, Yae Yokoyama, Kazunari Onishi,Takenobu Hosoda, Mikizo Okamoto and Youichi Kurozawa, Long-Term Effects of Livestock Loss Caused by Dust Storm on Mongolian Inhabitants: A Survey 1 Year after the Dust Storm, Yonago Acta medica, 査読有、56, 2013,39-42

③大谷眞二、山本直子、佐藤尚喜、松波馨士、岡本幹三、黒沢洋一、終末期がん患者における呼吸器症状と輸液量の関係、Palliative Care Research、査読有、7、2012、185-191

④ Takenobu Hosoda, Yoneatsu Osaki, Hiroteru Okamoto, Takako Wada, Shinji Otani, Haosheng Mu, Mikizo Okamoto and Youichi Kurozawa, Evaluation of relationships among occupational stress, alcohol dependence and other factors in male personnel in a Japanese Local Fire Fighting Organization, Yonago Acta medica, 査読有, 55, 2012, 63-68

⑤ Yoneastu Osaki, Shin-ichi Taniguchi, Aya Tahara, Mikizo Okamoto, Takuji Kishimoto, Metabolic syndrome and incidence of liver and breast cancers in Japan, Cancer Epidemiology,査読有, 36, 2012, 141-147

⑥岡本幹三、黒沢洋一、尾崎米厚、岸本拓治、鳥取県における多重がんの発生に関する疫学的研究－登録方法と進展度から－、JACR　Monograph、査読無、17 巻、2011、43-45

〔学会発表〕（計　5 件）

①岡本幹三、鳥取県におけるがん罹患・死亡の動向、第 54 回鳥取県公衆衛生学会、2011 年 7 月 15 日、米子コンベンションセンター（米子市）

②岡本幹三、鳥取県における多重がんの発生に関する疫学的研究－登録方法と進展度から－、地域がん登録全国協議会第 20 回学術集会、2011 年 9 月 15 日、千葉大学けやき会館（千葉市）

③岡本幹三、鳥取県における多重がんの発生に関する疫学的研究－登録方法と進展度から－、第 22 回日本疫学会学術総会、2012 年 1 月 27 日、学術総合センター・一橋記念講堂（東京都）

④横山弥枝、食品摂取パターンと消化器関連

がんの罹患・死亡に関するコホート研究、第71回日本公衆衛生学会総会、2012年10月23日～2012年10月24日、山口市民会館(山口市)
⑤山口孝子、職域乳がん検診5年間の成績と発見率向上についての検討、第56回中国四国合同産業衛生学会、2012年12月8日、岡山大学創立50周年記念館（岡山市）

〔図書〕（計　1件）
①鳥取大学過疎地プロジェクト（谷本圭志他編集）、過疎地域の戦略　新たな地域社会づくりの仕組みと技術、学芸出版、2012、212

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
岡本幹三（OKAMOTO MIKIZO）
鳥取大学・医学部・講師
研究者番号：４　０　０　３　２　２　０　５
(2)研究分担者
黒沢洋一（KUROZAWA YOUICHI）
鳥取大学・医学部・教授
研究者番号：５　０　１　６　１　７　９　０
(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：